

ミラノ日本人カトリック教会

Milano Cappellania Cattolica Giapponese (Luciano Mazzocchi 神父)

2011年—6月26日御聖体の主日

福音ヨハネ6・51－58

わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが、与えるパンとは、世を生きかすためのわたしの肉のことである。」

それで、ユダヤ人たちは、「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」と、互いに激しく議論し始めた。イエスは言われた。「はっきり言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。これは天から降ってきたパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べるものは永遠に生きる。」

福音を顧みて

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。」

この話を聞いた弟子達の殆どはその意味を理解できず、一人又一人とイエスの後について行く事を諦めて退きました。恐らく、私達も、主イエスの言葉だから真面目に聞いておいても、一抹の当惑をせざるを得ないでしょう。主の教えを守り、その模範に倣うという事は、弟子としてご尤もですが、主の体を食べ、その血を飲むとは、一定の例えだと解釈しても、異常の表現に聞こえます。ところが、主は全く本気でそれを仰っていました。躓いて殆どの弟子が離れて行きましたが、残った十二使徒に「あなた方も離れて行きたいか」と主が仰ると、ペテロは「主よ、私達は誰のところに行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます・・・」と答えました。私達も、ペテロと一緒に叫びます「主よ、あなたは神の子キリスト、永遠の命の糧、あなたをおいて誰のところに行きましょう。」

人間は頭で人生の「道理」を見分け、知恵を習得しようとしませんが、表面的な一理が見当たっても、深い神秘を実感させてくれるのは生活的な体験です。「頭の理は心の理に及ばない」とパスカルが言っていた様に、キリスト様の心に接させてくれるのは、実生活の暖かい体験です。私達は、この世に芽生えた途端、一人残らず産声と共に母親のお乳を一所懸命に求めました。我が身を持って赤ん坊を養う母親は、やはり我が体と血を持って人

間を養い、潤すイエスと関連します。関連どころか、一致の姿です。秋が近づくと、春に満開を着飾っていた林檎の木は、葉を落し乍ら、ただ熟した実をと、通りかかる生き物に提供してくれます。

私の母は一生涯、体の弱い女性でしたが、実子七人と養子二人を育てました。ベッドに寝かされたその瘦せ果てた遺体を拝みながら、「皆、食べなさい。これはあなた方のために渡された私の体です。」という主の遺言を思い出しました。

ミラノの周囲の田舎には麦畑が多く有りますが、今頃は穂がすでに白んでいるので、収穫を待ち構えます。穂の一粒だけでも実る為には、天地の摂理の働きを必要としました。葡萄の房も熟する為には、更に夏の暑い光線も必要とされます。搾えられたパンの一切れと葡萄酒の数滴は祭壇に運ばれて聖別され、「主の食卓に招かれた者は幸い・・・」司祭が、皆さんを主の体と血で養って頂く様に、主の代わりに誘ってくれます。

被災で不毛に成った農地と有毒化された原水は、まさに十字架上のキリストの体です。しかし、キリストは復活します。そして農地も水源地も復活し、また豊作をもたらせてくれます。キリストの体！キリストの血！

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。」

どうして「終わりの日に復活させる」と仰るのでしょうか。それは、私達の遺体が、天国の喜びに与る前に、又、土に戻って地を肥やさなければなりません。灰は尊い肥やしです。こうして、また穂は一杯に実り、葡萄の房が熟するお陰で、後継の生き物は養われて潤されるでしょう。私達の体も、血もキリストと一体化しながら世の中を救った揚げ句、「終わりの日に」に主と共に復活します。沢山の友と共に。

分かち合い

以下の文章はザベリオ宣教会の Mastrotto 神父様を通して武庫之荘教会（尼崎市）の花巻吉彦さんから送っていただいた、感動的な証言です。感謝を述べながら、小さい篤彦君の清い心を大人私達にも授かり、聖体拝領を真心をもって慕うことが出来ますように。「はっきり言うておく。子供ののように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできな。」（マルコ10、15）。

洗礼を授かって

今年の復活祭に洗礼を授けていただきましたが、偶然にも武庫之荘教会の60周年という記念の年に洗礼を受けた、とのこと。受洗までの経緯を振り返ってみると、この記念すべき年に受洗することが運命的に決められていたのではないかと思えるくらい、不思議な思いがします。

キリスト教との出会いは、すでに信者となっていた妻との結婚に始まります。次に娘、息子の幼児洗礼があり、妻や子供達の信仰しているキリスト教がどんなものか？を知りたいために通いだした入門講座受講へと続きます。しかしこれらのことは、キリスト教への私の興味を喚起はしましたが、受洗を決意させるまでには至りませんでした。むしろ、武

庫之荘教会に近づけば近づく程、私が思い描いていた『心優しく寛容なキリスト教信者』の像が壊れたことも何回かあって、教会から足が遠のきそうになったこともありました。

ところが2008年に大変大きな出来事が私達家族におきました。それは皆様にも大変ご心配をお掛けした息子（篤彦）の不慮の事故です。この時に、①皆様よりいただいた『祈り』の力、②イエス様を慕う『信仰心』がもたらす力、そして③『御聖体』の持つ力、の3つの大きな力の威力を劇的に体験いたしました。あわせて人はこれら3つの力によって、肉体的にも精神的にも本当に救われることを目の当たりにしました。この体験により、私は受洗を決意するに至ったのです。

それでは私が受洗を決意した経緯を、私が息子の不慮の事故を通じて体験した『御聖体』と『信仰心』の大きな力に絡めて述べたいと思います。不慮の事故が起きた当時、息子は初聖体を受けられる年齢ではなく、初聖体の日を心待ちにしていました。ところが不慮の事故により危篤状態になり、医師から息子は助からないだろうと言われ、仮に一命を取り留めたとしても二度と意識は



洗礼者ヨハネ花巻吉彦さん（父親の右側に息子篤彦君）

戻らないだろうと言われていました。私は息子が『御聖体』を心から望んでいたことを知っていましたので、息子に対して父親としてできる最後のこととして、マストロット神父様に息子が意識のある間に規則を曲げて『御聖体』を授けてくださいますようお願いしました。神父様も事情をご理解くださり、入院中の息子をわざわざ訪ねてこられ『御聖体』

を息子に授けてくださいました。これで息子も『御聖体』を体を受けて天国に行けるなあ、意識のある内に神父様が来て下さって本当に良かったなあ、と見ていたこの光景を、今でもはっきり覚えています。

この特別な聖体拝領の後、今度は私達家族に大変嬉しい『奇跡』がおきました。すなわち、この『御聖体』を受けた次の日の朝、息子は危篤状態を脱し快方に向かっていることがわかったのです。この劇的な回復は医学的に説明できない、と医師も言っていました。しかし息子は、イエス様が自分を助けてくださったことをしっかり理解していました。息子が昏睡状態から目を覚ましたその日の朝、「イエス様とサッカーをして遊んでいたら、もう起きなさい、と言われた。そして風を感じて目が覚めた。」と付き添いをしていた妻に話したそうです。そして「神さまの作った世界はなんて美しいだろう」と、病室の窓の外を見て話したそうです。私はこの劇的な回復と息子の神様への感謝の言葉は、息子のイエス様への『信仰心』と『御聖体』の力が合わさって成し得た『奇跡』であると今でも思っています（この特別な聖体拝領とは別の話になりますが、みこころ幼稚園のお友達や武庫之荘教会の方々、そして息子のことを直接知らないにもかかわらず、教会のネットワークを通じて息子のことを知り、心配くださった多くの信者の方々が息子の回復を『祈って』くださっていたことを後日知りました。この『祈り』の力も『奇跡』を引き起こす原動力になったと思っています。）

このような『奇跡』を目の前にした後、イエス様は本当に神の子で何でもできる方である、と信ずることができるようになったのです。また入門講座で学んできたイエス様の御言葉が、私には歴史上の人物の単なる言葉から、日々の生活の中で拠り所とすべき『教え』に大きく変わってしまったのです。そしてさらに、洗礼を受けイエス様の弟子として新たな人生を歩み始め、妻、娘、息子と共に、家族でイエス様の教えをできるだけ実践していこう、と思うようになったのです。まさに『回心』したのだと思います。

このようにここ数年の間に大きな出来事に遭遇しながら、『信仰心』、『御聖体』、『祈り』の大きな力を知り、受洗を決め、洗礼と堅信を受けたのが武庫之荘教会60周年のあたる今年だったのです。始めにも述べましたが、運命的な力によって記念すべき年に洗礼を受けた、と思っています。『神の御計画』と言って良いのでしょうか？

私も堅信の秘跡まで終えましたので、まだまだ新米ですがイエス様に倣う一人の信者として、『私があなた方を愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさい』という教えを特に心に留めていきたいと思っています。隣人のためには自分の命をも差し出す覚悟が必要という非常に難しい一生の課題となりますができる限りの努力をしていきたいです。

また先にも述べましたが、息子が危篤のとき、多くの方にいただいた『祈り』の力の恵みも与えていただきましたので、自分の家族だけでなく多くの方々のために、病気の治癒、困難や苦しみの軽減を神様に祈っていきたいと思っています。

『隣人を愛するために隣人のために祈りながら今後の人生を生きる』、これが私に課せられたイエス様の命令と思って実行していきたいと思っています。

以上

